

慈濟

ものがたり

ツーチャー 2019年8月 272





● 表見返し 文・證嚴法師

訳・済運 撮影・蕭耀華

衆生を悟りに導き、福と慧をもたらす

人の世の苦を知って初めて慈悲心と智慧は成長し、

理念を堅持してその双方を運用するのです。

清浄無垢な行いで苦を樂に変え、

広く衆生を悟りに導き、皆で福と慧をもたらしましょう。

目次

【社論】

艱難な時代の感動的なパワー

慈願／訳 4

【主題報道】

山と海に囲まれた土地で
台東慈済の半世紀を遡る

有田夏子／訳 8

台東初めての慈済ボランティア黄玉女

惟明／訳 34

この道一筋三十年 宋美智

心嫻／訳 44

【特別報道】

サイクロン・イダイ支援で
希望をもたらし、再建が始まった

李曉萍／訳 52

【納履足跡】

傲慢にならず卑下もしない

済運／訳 66

【大地の守護者】

澎湖（ポンフー諸島）

ごみの波に翻弄される島
環境保全の責任を担おう

常樸／訳 70
明陞／訳 84

【證嚴法師のお諭し】

あの一年を忘れること莫れ
その一念を忘れること莫れ

慈願／訳 100

慈済大事記【七月】

済運／訳 106

表紙



台湾の離島・ポンフー諸島は観光シーズンになると月間のゴミの量が千トンを越し、沿岸に漂着する海洋廃棄物の量は増える一方である。慈済環境保全ボランティアはその回収の重責を担っているが、誰もが自分の作り出すゴミの問題を正視する必要がある。
(撮影・黄筱哲)

艱難な時代の感動的なパワー

「苦難の多い時代では目を開けるとこの世が見え、目を閉じると地獄が見えます。しかし、この数日、目にするのは菩薩ばかりです。そう！苦しみの多いこの世には菩薩が必要なのです」。これは先月證嚴法師がサイクロン・イダの被害を被った東アフリカ三カ国について心を砕いて語ったもので被災地は地獄のようだと言った。幸いにして多くの国の慈済ボランティアが現地ボランティアと共に、悪路を厭わず、食糧の緊急支援を順調に終えた。

今回、被災したモザンビークとジンバブエ及びマラウイは全て年間平均収入の低い貧困国家である。

慈済ボランティアは遠い距離を物ともせず、台湾、マレーシア、アメリカ、中国及び南アフリカなどから被災地に赴き、三カ国の現地ボランティアが言語や文化の隔たりを補った。彼らは万難を突破して被災者に食糧や住宅用の建材と大工工具及び生活に必要な農作物を届けた。

東アフリカ三国の貧困状態を今日の豊かな台湾と比較すると、まるで別世界のようだ。しかし、半世紀前、證嚴法師が花蓮に落ち着き、苦勞して慈善行為を始めた時は、まだ東部の住民も貧しく、今から考えると想像し難い光景だった。なかでも花蓮よりも遠方にある台東は尚更だった。

今期の主題報道に載っているが、慈済功德会設立一年余りの時、法師は新聞の報道で台東のある墓の側に住む失明した年寄りの話を知って訪問し、そ

れが慈済の長期ケアの最初のケースとなった。その時、小学校校長をしていた王添丁夫婦が大いに支持してくれたお陰で、貧困者の訪問ケアが当地に深く根を下ろすきっかけとなった。

その頃、政府の社会福祉政策には、貧困家庭をケアする制度が確立されておらず、台東の慈済ボランティアは法師の指示のもとにケアを必要としていた貧困家庭の調査を行っていた。彼らは山間部や海辺、離島にも出向き、ひと月以上掛かる時もあつたが、氣力と忍耐で遂行した。また、毎月の配付活動では施療も行つた。

「台東慈済経験」は、慈済史上幾つかの重要なマイルストーンとなった。例えば一九六九年の強い台風エルシーが引き起こした卑南村の大火の際に行つた支援は初めての大規模な災害支援となった。次に一九七三年の台風ナラの

被害に対しては、それまで最も被災者数が多くて広範囲にわたる支援となつたため、最も高い援助額に方策を練ることとなり、今日の支援活動の基礎となった。

社会の工業化につれ、人口が流失し、台東は一九九〇年代には既に「高齢化社会」に突入していた。医療及び福祉資源に限りがあつた環境の中、王校長夫婦に従って訪問ケアをしていた人たちも老いて少なくなり、若いボランティアたちにバトンタッチされるようになった。

台東慈済訪問ケアボランティアによる歴史の口述と記録は今年六月に上梓されるに至り、困難な時代の支援の足跡と感動的な慈悲心の願力を実証している。それはこれまで長い年月をかけて慈済が行つて来た国内外での苦難の支援を語る時に忘れてはならない出発点でもある。（慈済月刊六三一期より）

山と海に囲まれた土地で 台東慈濟の半世紀を遡る

◎文・慈濟期刊部「慈濟の歩み」書籍編集チーム
写真提供・慈濟花蓮本部 訳・有田夏子

●1980年代の慈濟による台東訪問の路線図。経験豊富な訪問ボランティア、鄭怡慧の手書きによるもの。当時はすべての訪問活動を終えるのに1ヶ月を要した。



台東では初期の頃、證嚴法師が自ら先頭に立って慈善訪問に赴いた。一九七三年、台風十五号（アジア名：Nora）が花東地区を襲い、台東に甚大な被害をもたらしたとき、慈濟人は力の限り支援活動を行った。

その後の慈善活動の多くは、王添丁校長とその妻黄玉女が中心となり、余輝雄、宋美智、范春梅らとともに、山を越え、海を渡り、各地の貧しい人々を訪ねた。

慈善の足取りは、社会の片隅にまで深く歩み入り、生活に苦しむ人々に寄り添い、その心に暖かい光を灯した。

台風十五号による 台東の大災害

●1973年10月9日、台風15号の外縁の気流が豪雨を降らせ、花蓮の玉里から台東の大武にかけて深刻な災害をもたらした。知本溪付近の温泉宿（下図）、台9線寶朗橋（左図）も大雨に続く土石流に流された。当時、花蓮と台東を結ぶ橋の多くは鉄道と道路を併用しており、災害により橋が断裂すると、鉄道と道路が同時に中断され、迅速な救助活動を展開することが困難となった。

（写真提供・農委会水保局第五工程所）





復旧支援における 方法の確立

●1973年11月4日、證嚴法師と慈濟委員、そして慈濟貧民施療所の医療ボランティア達50余人の一行は鉄道で南下し、玉里で救済物資の配付と施療を行った。百世帯にのぼる被災者に対し、家屋の毀損程度や家族の人数に応じて支援活動をおこなった。支援の過程では「直接、重点、尊重」の原則と「視察、記録、募金、配付」の流れが確立され、この方法はのちの災害支援活動の拠り所ともなった。

(上図・花蓮本部提供)

一 九六〇～七〇年代の台湾社会は普遍的に貧しかった。毎年立冬の頃になると、政府や民間慈善団体が冬季救済活動を行い、人々に思いやりと助け合いを呼びかけた。慈濟功德会は一九六九年初頭より冬季配付活動を始めが、いつも年越しの数ヶ月前になると、慈濟委員達は長期ケア世帯の調査や、配付品の買い付け、包装などの作業で大忙しであった。

一九七三年、證嚴法師と委員たちは例年より一カ月早く奔走しはじめた。冬季配付のためではなく、台風十五号のもたらした甚大な被害に対する支援活動に着手するためだった。

十月八日早朝五時、中央気象局が台風

十五号の大雨特別警報を発令した。その翌日、台風は台湾西南の海上を通過し、金門島を通り抜けて中国大陸へ到達した。台風は台湾を直撃することはなかったが、しかし三日連続の豪雨が、花蓮県玉里以南、台東大武にかけて、総計で死者・行方不明者六十八名、負傷者八十五名、家屋全壊千二百五十一棟、半壊四百三十三棟という、深刻な被害をもたらした。

なかでも、台東県卑南郷の新斑鳩溪が氾濫して上流の天然ダムが決壊したこと、大規模な土石流が発生し、堤防の決壊や橋の断裂で民家が押し潰され、美農村では二十余人が死亡した。台東史上最

も深刻な災害であり、県内では二万六千人にものぼる人々が被災した。

幸福にある人は、
不幸にある人を憐れむべし

花蓮から台東までの道のりは、十数本もの河川を渡らなければならないが、橋の多くが鉄道と道路を併用していたため、災害により橋が断裂すると、鉄道と道路が同時に不通になり、直ちに救援を行うことができなくなった。災害発生後十日、證嚴法師は委員懇親会の席で心を痛めておっしゃった。「交通は途絶え、

連絡も絶たれ、災害の詳細は量りかねますが、恐ろしい状況であることは間違いないありません！幸い花蓮は平安無事でしたが、幸福にある人は、不幸にある人を憐れむべきです。準備を整え、道路が復旧したら直ちに視察を行い、支援活動を展開しましょう！」

災害発生から半月後、損壊していた橋がついに開通した。十月二十四日、證嚴法師と花蓮委員会から多くのボランティアが玉里に赴き、現地の委員の付き添いのもと、被災地の視察を行った。住民の多くは「八七水害（一九五九年八月七日、台湾中南部で発生した大規模水害）」の

被災者で、台湾中部から中央山脈を越えて東部に移住し、この地で新たに生活を始めた人々であった。まさかその十四年後にまたも水害に襲われるとは思ってもなく、ショックのあまり、病気で立ち上がれなくなった人や、喪失の大きさに耐えきれず精神に異常をきたす人もおり、心が痛む状況だった。證嚴法師は被災世帯を一軒一軒慰問し、村長に記録を依頼した。

法師は花蓮に戻ると、花蓮の委員二十余名全員を集めて会議を開き、「このたびの被災地域は広く、被災者の数も多く、功德会だけでは負担しきれません。委員

の皆さんが災害支援チームを結成し、全力で募金集めにあたって下さる事を期待します！」と言われた。

会議書記を担当した江木火は、三十一号委員である邱蘭嬌の夫であり、花蓮合作金庫のマネジャーでもあったが、證嚴法師が大まかに見積もった台風十五号に関する支援の必要経費が台湾ドル六十萬元であることを聞くと、手に持っていたペンを下ろし、傍にいた徳融師父に心配そうに尋ねた。「そんな大金を、一体どこから集めればよいのでしょうか」

年初に顧問として招聘されたばかりの江木火の心配は、けっして杞憂ではな

かった。もうすぐ年末の冬季配付も始まるというのに、功德会慈善基金は二十萬元余りしかなかったからだ。

證嚴法師は、年内に配付を完了することを望んでおられた。年末まであと一カ月余り、「できるだろうか」と心配したのは彼だけでなく、その場にいる全ての委員達も同様であった。だが、證嚴法師は被災地の人々が助けを必要としていることだけを一心に想い、困難にとらわれることはなかった。

冬季配付への影響を避けるため、證嚴法師は重要な決定をおこなった。災害支援の「専用口座」を設け、台風十五

号用に集めた寄付金を全額、台風被災者の支援に充てることにしたのである。この「専用口座」を作るという方法は、のちに慈済が大型急難支援をするときの通則となった。

実態のある支援を届けることが、支援者の善意に報いること

「お金が無いからといって、見過ごすことはできません！」證嚴法師の言葉は、東部の委員達の心を動かした。皆が全身全霊で、募金活動をすすめた。短期間で六十萬元もの救済資金を集めることは容

易ではなかったが、災害支援は迅速さが命であり、證嚴法師は募金活動を台湾西部まで広げる必要があると考えた。

台北の委員は台風十五号への救済募金話を聞くと、「新聞で報道されていないので、西部で台東の災害状況を知る人はいません。募金は難しいです」と證嚴法師に伝えた。證嚴法師は大衆に善行を呼びかけるため、台風十五号の災害状況や慈済の支援計画を一字一句鋼板に刻んで赤い紙に印刷すると、台湾全土四千余名の会員へ送った。

台湾全土から古着が次々と届いた。その一着一着に、寄贈者の思いやりがこめ

られていたが、社会はまだ貧困で、衣服には何度も補修を重ねた跡や、ボタンが取れたもの、ファスナーが壊れたもの、きれいに洗濯されていないものも多かった。證嚴法師は、その一つ一つを点検するようにと委員達に注意深く指示された。汚れた衣服は洗濯し、破れたところは補修し、破損がひどいものは破棄し、きれいに整理した後、性別と年齢層に分け、アイロンをかけ、きれいに畳んだものを被災者に届けるようにという丁寧さだった。

多くの人々の思いやりが結集して、救援活動は迅速に展開することができた。



十一月四日早朝六時、證嚴法師と委員、そして慈濟貧民施療所の医療ボランティア達の一行は五十名余り、鉄道で南下し、玉里にて配付と施療をおこなった。家屋が全壊または半壊した百戸余りの被災世帯に対し、五百元から二百元の救済金を配付し、また各家庭の人数に応じて慰問金を追加した。総計で七万三千四百元、掛け布団百枚、衣服一千着を寄贈した。

玉里の災害支援は円満に終わった

●1981年台東慈濟冬季配付活動。長期ケア世帯に生活補助金の受領を案内する王添丁校長（中）。

が、その次にはさらに深刻な被害に見舞われ二万人余りが被災した台東への支援が待っていた。證嚴法師は考えた。被災地は広大で被災者も多数にのぼる。どうすれば一番助けを必要とする人々に、本当の支援を届けることができるだろうか？

「災害支援金は人々の心血が集まったものです。すべての家庭に配付しても、それぞれが受け取るのがスズメの涙ほどでは救済効果は薄くなってしまいます。使い方が適切ではなければ災害救済の意義が失われるだけでなく、募金者の善意にも申し訳が立ちません。『実態のある支援を届けることが、支援者の善意に報

いること』だと良く考えて、これを成し遂げなければなりません」。

證嚴法師は「重点」の原則を採用することにした。助けを一番必要としている人、すなわち自力での復興がかなわない貧困家庭を救うことにしたのである。そして委員達に向かって、「一軒一軒を尋ね、家庭背景や家族構成、生活状況をよく調べてください。初期調査後に再度二次調査をして書類を作成するのです。それがこれからのように援助を進めるかを判断する根拠となります。『重点的に直接』を心掛けて災害救済を行いましょう」とおっしゃった。

台東から花蓮までの距離は約二百キロ

あり、普通のディーゼル列車では五時間余りもかかる。道のりはかくも長いが、十二月五日、台東行きの道路がなんとか開通すると證嚴法師はすぐに委員を率いて南下し、数日にわたる家庭訪問をして調査を進めた。

台東温泉小学校の王添丁校長（法号：思安、第五十七号委員）とその妻黃玉女（法号：靜觀、第四十六号委員）は、功德会に加入して僅か一年余りであつたが、證嚴法師が到着する前にすでに初期調査を終え、一万人近い被災者の中から六千名余りの生活困難者を見つけ出していた。おかげで花蓮の委員達は、慣れな

い土地で一から手探りすることなく、すでに選ばれたケースを再調査する形で進めることができた。

視察、記録、募金、配付

新しい掛け布団ときれいに畳まれた古着が貨物列車十五輛一杯に積まれて花蓮から台東まで運ばれ、その後トラックで輸送された。車体には「慈濟台東災害救援品」の旗がかけられ、警察と住民の協力の下、次々と被災地に到着した。物資が届くと、證嚴法師と委員達は南へ向けて出発し、十二月二十五日、二十六日に

介寿堂を借りて配付活動を行った。

これは慈濟功德会の設立七年以来、最大の災害支援活動であり、活動範囲は台東池上、鹿野、卑南、太麻里、東河、關山などの村落にまで及んだ。家屋損壊の程度や家庭の人数に応じて、合計で五百五十四世帯、二千六百三十一人を支援、現地で配付と施療を行った。遠隔地からの往来が難しいことを考え、金崙、太麻里などへは専用車で被災者を送迎した。また關山、月眉、鹿野などの地区の被災者には、交通費を支給することにした。台風十五号の被害において、慈濟は花蓮の玉里から台東まで六百七十一世帯に

対して、掛け布団五百枚余りを配付し、総額六十万余元余りを支出した。その行為は、地方政府の長からも「雪中に炭を送る」行為として称えられた。

台風十五号の災害支援における、「直接、重点、尊重」の原則と、「視察、記録、募金、配付」の流れは、のちに慈濟が国内外で大型の災害支援を発起する際にも、その抛り所とされる方法となった。台東地域は広くて山と河が多く、現地の人々の案内がなければ各地を訪ねることは難しい。災害支援活動のなかで、證嚴法師がもつとも懐かしく思い出すのは、王添丁校長とその妻黃玉女教師であつた。

王校長の妻黄玉女は、それより早く十二年前に證嚴法師と出会っていたが、それは不思議な縁であった。時間は一九六一年に遡る。

修道法師と静思^{ジンスイ}と名乗るおさげ髪^{しょうがみ}の正学女^{がくによ}（出家者として修行に励む人）が、弘法のため台東の仏教蓮社を訪れていた。修道法師の講義中、静思は傍で法師を助け、また時々壇上に上っては法師のかわりに仏教の故事を語っていた。小学校の教師であった黄玉女は、しばしば蓮社に来て経を聞き、のちに修道法師に師事した。しかし残念なことに、修道法師と静思は蓮社に一年余滞在した後そこを

離れたため、その後、黄玉女は彼女らの消息を聞くことは無かった。

花蓮で文房具店を経営していた慈濟委員の李時（法号：静恒）が台東に出張した時、旧知の仲である黄玉女に慈濟委員になるよう勧めた。黄玉女はその場で承諾し、数カ月後には募金活動を手伝い始めた。のちに自ら静思精舎を訪ねた時、ようやく功德会の創始者が證嚴法師、つまりあの時の静思であることを知ったのである！

夫の王添丁は彼女の慈濟への献身を大いに支持し、夫婦そろって校内の同僚から募金を開始した。また、学校にも助け

を必要とする子供達がいることを知り、功德会に報告して支援の判断を仰いだ。

これらの救済案はいずれも、さらなる調査や深い関わりが必要となるものであり、王校長夫婦は学校での功德会の代表を務めていた。そして、一九七二年三月より、彼らは台東慈濟委員として、現地で貧困や病、孤独に苦しむ人々に寄り添った。

墓地の傍に住む盲目の老人

それより早く、功德会が成立して一年余りの頃、長期支援の対象となる貧困家庭はすでに台東まで広がっていた。

六十五歳の呉發超（走へんに若、発音：ノウ）おじいさんは、台東第一公共墓地にある茅葺きの家に長年住んでいた。体力が衰えていなかった頃は、お墓の隣に野菜を植えたり、墓地へお参りに来た住民が置いていった食べ物などで、なんとか飢えをしのいでいた。だが、年をとるにつれて体が弱り、視力も落ちてほぼ全盲となり、生計を立てることが難しくなった。

一九六八年一月、證嚴法師は「更生報」で老人の境遇を知ると、すぐに三百円を用意して出版社経由で送り届け、また三月二十三日、老人を訪ねるため列車で南下した。五時間もの長い道のりを経てよ

うやく、海辺に近い墓地の中で、骨と皮ばかりにやせた老人の家を見つけた。

證嚴法師は老人の手を取ると、二百元の生活費を手渡した。「おじいさん、安心してください。これからは私達が生活の面倒を見ます。目の治療にもお連れします。医療費は私達が負担しますから!」

花蓮へ戻ると、證嚴法師は老人の治療について尋ねてまわった。十日後には急ぎ台東へ向かうと、自ら老人を連れて台湾を半周し、台中の沙鹿の医者を探ねた。

「先生、まだ見えるようになるでしょうか?手術の可能性はありますか?」證

嚴法師は期待をこめて聞いた。医師は検査の結果を見て、申し訳なさそうに答えた。「手遅れです!高齢で体も弱く、手術の必要もないでしょう」。

證嚴法師は失望して彼を台東に送り届けた。立ち去る前に老人に六百元の生活費を手渡し、これからは慈済が毎月三百元の生活補助金を届けますと、慰めた。

功德会が成立して一年余り、経済的に苦しい時期、彼は台東における一人目の長期支援世帯となった。三カ月後、省立台東医院に医療費を支払うことができな

い貧困者が二人いると聞くと、證嚴法師は再度南下し、医療補助を与えた。

翌年、一九六九年中秋のころ、台風十一号(アジア名: Elsie)が来襲し、台東の卑南郷大南村が大火にみまわれ、一四八世帯が火の海に飲み込まれた。證嚴法師たちは苦労を厭わず何度も往復して災害支援活動を成し遂げた。

●1970年代、證嚴法師は台東鹿野の長期ケア世帯を巡ね、委員と共に簡素な茅葺きの家を見て、生活状況を理解した。



貧困を理解する程、
病苦が見えてくる

最初の頃、距離と人手不足のため、慈濟の台東における活動は小規模に限られていた。慈善活動が大きな一歩を踏み出したのは、王添丁と黄玉女が加わってからのことである。

黄玉女は、慈濟に加入して一年目の頃、補助の目安がよく分からず、一九七三年三月二十三日、證嚴法師に手紙を書いた。

お師匠様：

今日午後、空き時間を利用して三名の貧困者を訪ねました。一人は六十七歳で

をするため今は外で働くことができません。上は十七歳から一番下が六歳の五人の子供達は、ロータリークラブの貧困者向け住宅に住んでいます。

貧困地区にはもう一人、趙雲鵬さんという人がいます。五十六歳で肝臓病を患い、以前は清覚寺が医療費を負担して省立医院や榮民医院で手術を受けたこともあります。しかし再発後、家が貧しいため病院に行こうとせず、清覚寺の住職が再度病院に連れて行くとしています。治療費が二千元余もするようです。功德会で医療費の補助としばらくの間生活補助をすることはできないでしょうか？彼は子供が七人

身寄りの無い林おじいさんです。子供は一人いますが三、四年前に家出し、今では音沙汰がありません。障害があり（片手が無い）、肝臓と腎臓を患い、体がひどく浮腫んでいます。医者に連れて行きましたが、お金が無いためか、他の理由があるのか、医者にも治療を拒絶され、病に臥したままです。家の一角を借りて建てられた住まいは足の踏み場が無いほど狭く、そこが生活の全てで、とても可哀想です。

もう一人は呉阿雲さんという四十三歳の男性です。リウマチでもう四ヶ月も床に臥しており、排泄にも介助が必要です。妻は元来仕事に就いていましたが、夫の世話

おり、十五歳の長子は家が貧しいため休学しています。

貧困地区には他にも多くの可哀想な人々がいますが、私は手紙を書くのが苦手なので、詳しく紹介することができません。お師匠様が台東へ視察に来られ、彼らを温かくお助けくださればと願っています。

黄玉女は敬虔な心で、辺境にある交通が不便で開発が遅れている花東縦谷を訪ね歩いた。そこでは若者の多くが生活のために西部へ移り、年寄りたちが残されて孤独に家を守っていた。證嚴法師は家出する前に理想的な修行の場所を探し

歳末支援

●当初台東では、少規模の支援がおこなわれるだけだったが、地元のボランティアが増えたことで、慈善活動は大きく成長した。通常の長期ケアだけでなく、定期的冬季配付を開始した。



1979年、現地では長期ケア世帯に生活物資を配布したほか（図1）、施療所（図2）、ボランティアの床屋（図3）を設けた。長期ケア世帯の配布場所への往來のため、ボランティア達が送迎バスを手配した（図4）。



て、花東縦谷の奥深い地を歩き、貧困、病、孤独に苦しむ多くの人々を見てきた。黄玉女が手紙で語った情景はまさに、證嚴法師が長年気にかけてきたことであった。十日後の四月二日、證嚴法師は多くの花蓮の委員を引き連れて、台東を訪問した。

視察訪問を経て、五十六歳の趙雲鵬さんには三千元の医療費を負担し、一家九人を長期支援世帯に登録して毎月白米六十九斤（約四十一・四キログラム）を補助することにした。また半身不随の呉阿雲さんも、子供たちが皆、幼いため、長期支援世帯に登録して毎月三百元と白

米四十六斤（約二十七・六キログラム）を補助することが決まった。まだまだ助けが必要な人がいるに違いないと、半月後の四月十七日、證嚴法師は再度南下し、訪問を続けた。

小さく薄暗いあばら家に入ると、強烈な悪臭が鼻を衝いた。七十二歳の先住民、周仁来は両脚が壊死して爛れ、傷口はうじ虫に覆われ、その上にハエが飛び回っていた。委員達の多くは耐え切れず屋外へ飛び出して嘔吐したが、證嚴法師はその悪臭が臭っていないかのように、床に近寄り、身を屈めて慰問した。

台東にはこのように、長く病に臥しな

がら、治療を受けることもできない貧困者が数多くいた。證嚴法師は彼らを見捨てることができず、施療所の医療ボランティア達を招聘して、この地で施療を行うことを決めた。

慈善と医療を一体で進める

一九七三年五月六日、慈濟施療所の張有傳、張澄溫父子、黃博施三名の医師と看護師の林碧芭、鄧淑卿ら、そして王添丁、黃玉女夫婦が合流し、中正路の海山寺を借りて貧しい人々への施療をおこなった。

蘇萬貴の臉は神経が壊死していて、何かを見たいときは手でまぶたをこじ開ける必要があった。彼は施療所に入るなり話し始めて長く話したが、言葉がはつきりしないため誰も理解できなかった。委員達が近所の人を連れてきて翻訳してもらうと、ようやく彼の八十歳を超える父親が重病を患っており、医師たちに家まで来て診てほしいと訴えていることが分った。張澄溫医師は、それを聞くとすぐに身を起して言った。「私が行きましょう！」これが慈濟の施療史上初めての自宅往診に赴いた例となった。

その日、施療で百六十人を診療した。

またその時、證嚴法師や委員達が村落の奥地まで慈善訪問に赴いたことで、多くの人々が長期支援世帯に登録された。その月、功德会は、新たに十五の長期支援世帯が登録され、創立七年で最高となったが、そのうち八世帯を台東が占めていた。

一九七三年四月から九月の半年間、證嚴法師と委員達は遠路を厭わず、花蓮と台東の間を往来して貧困世帯の訪問にあたり、慈済の台東にける長期支援世帯は大幅に増加した。三度の施療で六百人近くを診療し、また多くの現地の医療従事者やボランティアたちが、

慈済とともに、慈済の貧困と病を支援する列に加わった。

第三回施療から一週間後、台風十五号が来襲し、台東が深刻な被害を受けると、慈済は創立七年以来最も困難な災害支援活動を行うことになったが、そこでは、三回の施療が引き合わせてくれた現地の善意ある人々がとても大きな助けとなってくれた。呉尾、王松峨（静豪）、郭恒敏（静恒）夫婦らが加わるなど、台東の慈済委員が増えていったことにより、現地でより多くの貧困病苦の人々に寄り添い助けることができるようになったのである。（慈済月刊六三一期より）



●郭恒敏（右から1人目）、王松峨（左から2人目）夫婦、王添丁、黄玉女夫婦の四人は台東における最も初期の慈済委員だった。范春梅（左から1人目）は1987年、委員認証を受けた。（撮影・阮義忠）

台東初めての慈濟ボランティア

私の一生は比較的順調でしたが、心の苦しみや試練がありました。

慈済が私と家族を救ってくれたことに感謝しています。

黄玉女



(撮影・顔霖沼)

◎口述・黄玉女 整理&写真提供・花蓮本会文史処 訳・惟明

私

は一九二八年、台北の石碇に生まれ、養女となり、六龜に引越した後、台東に定住しました。十七歳の時に台東公立学校の教師になり、一九八二年に定年退職するまで三十八年間、教育の現場に立っていました。私の主人である王添丁校長は四十八年間教職を勤め上げました。

以前、證嚴法師は台東に来る前には必ず王校長に連絡しました。そして、私と静豪師姐が家の掃除やシーツの洗濯、布

団干しなどをして、法師が宿泊する環境を整えました。

一九六一年、私は台東仏教蓮社で初めて法師にお会いしましたが、当時、法師はまだ出家していなかったため、その後、連絡が途絶えました。十年後、花蓮の李時師姐の紹介で、ある法師が善行していると聞いて、募金集めを手伝いました。しかし、募金帖をもらっても誰を勧誘したらいいのか分からず、毎日、学校に持って行ってはまた、持って帰りました。

ある日、王校長に「ボーイスカウトのように一日一善、有意義なことをしましょう」と私は言いました。彼は大いに賛同してくれたので、各自の学校から始めることにしました。教師たちに会員になってもらい、そうやって少しずつ慈済を盛り上げて行きました。

数カ月後、私は花蓮に行って、その法師がどんな方か見てくるべきだと思いました。静思精舎に行って見ると、皆は忙しくしており、證嚴法師は畑にいて言われたので空き地に行くと、一人の法師が編笠をかぶって、手に持った長い棒で大豆を叩いていました。私が近づくと、

法師は編笠を取ったので、私は一目で證嚴法師だと分かりました。

法師がいてくれてよかった

證嚴法師が慈善事業をするにあたって最初にお金を費やしたのは花蓮で、その後が台東でした。台東に於ける慈済の最初のケースは吳發超という人で、彼は両目が見えず、海辺の墓地に住んでいました。私は法師について彼を訪ねたことがあり、その時はもう夕方近くなっていたましたが屋内に電気は点いておらず、内心とても怖かったのです。「誰かいます

か？」と法師が尋ねました。呉爺さんは屋内から返事し、ドアを開けてくれました。彼はトマトを食べたばかりなのか、口が真っ赤だったので、皆、びっくりしました。

法師は彼の目の治療のために台中市沙鹿区で検査が受けられるよう取り図

いました。呉爺さんは希望に満ちていて、と徳慈師匠が言ったことを覚えています。彼は、「この法師はこんなにも優しく、私が見えるようになるよう、治療を取り計らってください」と思いました。彼は精一杯目を大きく見開いて検査を受けました。その時に希望が見えたかのようでした。

しかし、長い間、視力を失っていたため、手術をしても視力を取り戻せないとい医師は診断しました。私はそれを聞いて悲しくなり、涙を流しました。彼の人生は真っ暗でしたが、幸いにもこの身寄りのないお年寄りには法師の寄り添いがありました。

そして、目の治療はできなくても、せめて生活を改善できるよう、慈済にお金はなくとも、方法を考えました。呉爺さんは台東における最初の慈善ケースであるだけでなく、医療ケースでもありました。私はこの経験から法師の慈善事業が徹底したものであることを理解しました。

見えれば、
行動に移すことができる

慈済に参加し始めた頃から、向いに住んでいた静豪師姐を家庭訪問に誘っていました。そして、だんだん彼女の主人も参加するようになりました。台東での冬季の物資配付は近所の欧順興先生宅の側の空き地を借りて行われました。

四十数年前、私はあまり個別案件のケアができず、法師に手紙で状況を説明しました。法師は私の手紙を受け取ると直ぐに台東まで来られ、私たちは法師と一緒に家庭訪問しました。

法師は私たちに案件の査定方法を教えてくれました。先ず、政府の援助があるかどうか、なければ慈済がいくら援助すれば生計が成り立つのかを判断します。後で訪問内容を記録に残し、毎月花蓮に帰って報告しました。やがて少しずつ援助の基準と原則が分かるようになりました。

私は法師と一緒に慈済の仕事をしていたため、法師の苦勞がよく分かりました。体が弱く、心配事が多かったのです。それが分かって心を打たれたが故に、真剣になったのです。

当時、台東のボランティアは大武、池上、長浜などにわたって四、五百件のケー

スを抱えていました。何回かに分けて訪問し終わるのに、大体ひと月掛かりました。訪問する時は、一番遠い所から始めました。そうすれば、翌日は遠くまで行かなくても済むのです。

王校長はスクーターに乗って訪問しており、当時としては最高の交通手段でした。その後、働き盛りのボランティアが増え、訪問するのが週末や休日になり、何台もの車で行くようになりました。

慈済は毎月、花蓮で全台湾委員懇親会を開いており、行くと必ず、尼僧たちが昼間は持ち場の仕事をこなし、夜には基金会の事務や家庭訪問の記録を書き写し

たりしていたのを目にしました。皆、その精神を見習って、どうやって善行して、それを人に話すかを学びました。そうやって委員が増えていったのです。

范春梅師姐は花蓮慈済病院が開業した年に参加したボランティアです。彼女は訪問記録を詳細に書き、募金の勧誘にも精を出していただけでなく、毎月観光バス二、三台分の会員を花蓮静思静舎に案内し、慈済の活動に参加させていました。

「慈済がしていることを自分の目で見てきたので、慈済に参加するようになったのです。他の人も自分のように積極的な人を誘うことを望んでいます」と彼女

が言いました。今、私は年をとり、体も弱くなりましたが、幸いに、若い人たちが出てきてくれました。

持続するのは難しくない

私と校長は、校務や授業で忙しい上に、慈済の任務やあれだけの数の家庭訪問をどうやって続けていたのですかとよく聞かれます。堅持するのはとても簡単でした。それがとても有意義なことだったので、自ずと堅持できたのです。

王校長は皆を連れて家庭訪問した時、いつも皆にご馳走しました。「メシに行こう!」と言って、レストランやラーメン

屋でもてなしました。しかし、大半の場合は、法師が私たちを連れて家庭訪問する時のように、途中で場所を見つけて、木陰、海辺、東屋で食事を済ませました。

ある日、訪問の途中で大雨が降り出したので、皆が帰ろうと言いました。「ダメだ! 雨風に負けてはいけない」と校長は言いました。校長は元々教育に携わる人だったため、慎重且つ正確に案件を進め、最初から最後まで質疑応答の内容を全て記録していました。前後して五百件ほどもあるのですが、全て記録が残っています。

台東にはお年寄りの案件がとても多く、「実情を詳細に聞いて、注意深く立



●王添丁、黃玉女夫婦と次男の王壽榮、嚴玉真夫婦は台東と嘉義で慈済の慈善事業の歴史を作った。

(撮影・阮義忠)

案するのです」と校長はいつも口にしていました。それはいい加減に立案してから二、三カ月で終わらせてはならないということですよ。もし、支援しなくてもいいようになった案件でもよく考え、終わらせる原因や理由が明確且つ正確でなければならぬのです。

訪問先に到着すると、大部分の人は王校長に続いて中に入り、残りの人は隣近所から話を聞きました。そうすれば後で話を突合せた時に実情がすべて把握できたからです。しかし、二〇〇〇年ごろから隣近所に話しを聞くことが逆に疎まれるようになり、そのやり方が通用しなく

なりました。

私たちは訪問先の食卓を覗いたり米びつを開けたりしましたが、それは食事の良し悪しを調べるのではなく、食糧が足りているか否かを知りたかったのです。校長は「あなたの月給はいくらですか？　どうして低所得者世帯として申請していいのですか？」とストレートに聞くことはありません。彼の聴き方は優しく、相手の心が固くならないようにし、世間話をしながら相手から実情とニーズ聞き出す一番良い方法を取っていました。

王校長が定年退職した後、一九九一年頃になると、私たちも年を取ってきたた

め、手元の案件を若手に引き継いでもらいました。校長が皆に教えたことはとても多く、またボランティアから質問を受けると直ぐに答えてアドバイスしました。例えば、鄭怡慧姉姐は訪問記録を書いている途中、続きが分からなくなると、すぐ自転車に乗って、角を曲がった所にある我が家に来ていましたが、校長はあらゆる質問に答えていました。

私の人生は順調だったとはいえ、人生の苦しみや鍛錬も少なからずありました。慈済が私と家族を救ってくれたことに感謝しています。王校長は私と一緒に慈済に参加し、私以上に慈善に投入して

いたので、彼からとても多くのことを学ぶことができました。

私は現在九十歳を過ぎ、数年前に転んでから、体力が弱まりました。幸いにして、子供たちが慈済の志業を受け継ぎバトンを受け取ってくれました。息子の壽栄は嘉義で最初の慈済委員となり、嘉義地区だけでなく、雲林も世話していました。慈善活動の後継者が出来て、私の願いは叶いました。（注：王添丁校長は二〇一七年、享年九十五才で他界しました）

（資料提供・江淑怡、林厚成、陳若儀）
（慈済月刊六三二期より）

この道一筋三十年

誰も私たちがボランティアになることを強いたわけではありません。ただ生きているうちに、因縁を大事にしなければならぬとの思いで、心安らかに、人生の最期までボランティアに尽くせば幸せだと思うだけです。

宋美智



(撮影・顔霖沼)

◎口述・宋美智 整理、写真の提供・花蓮本会文史処 訳・心燐

—— 九八二年のある日、台東県のある手芸店でボタンを買っていた時、慈済ボランティアの龔梅花さんがある人に慈済を紹介していたところに出会いました。私は彼女の話聞き終わってから、慈済の会員になれるかどうかを尋ねました。その日から私は淨財を寄付するようになりました。

私の夫、余輝雄は「土地銀行」の台東支店に勤務し、一家七人を養っていました。義母は健康状態が悪く、しばしば喘

息の発作を起こしましたが、注射すると次第によくくなりました。医療費が高価なため、我が家は病のために貧困になるケースと言えました。

私は「一生このように貧乏なのだろうか？」と思ったことがあります。一九八〇年から牛乳配達を始めました。朝四時過ぎに自転車で喫茶店や会社、駅などをめぐって届けました。初めのころは牛乳一本の配達料は五十銭でしたが、その後一元(約三円)になりました。



● 1980年代、余輝雄と宋美智夫婦は台東に移住し、余輝雄は「土地銀行」に勤め、宋美智はパートで牛乳配達をしたことで、家計は次第に改善された。

牛乳配達の仕事は二十年間続けましたが、牛乳を新鮮なうちに届けたくて、配達の途中で麺類やおやつなどを食べたことはありません。また、雨の日が嫌で、冬はともかく夏場はレインコートがとても蒸し暑く、服がびしょ濡れになったのです。でも、牛乳配達をしたことは家計の改善につながりました。

慈済の会員になってからは、ボランティアの黄玉女さんと花蓮の静思精舎に行って「仏七」（注）に参加し、證嚴法師のお諭しに心を動かされ、なんて智慧

●注 仏七：お寺で七日間、法会に参加する活動。

のある師匠なのだろうと感銘を受けました。仏七が終わってから私は法師に帰依しました。台東に帰る途中、「これから法師について慈済の志業をしよう」と心に決めました。また、「牛乳配達先のお得意さんに慈済の会員になってくれるようお願いしよう」と願をかけました。

私は「慈済では愛のある人や裕福な人が弱者を支援しているから、私も参加することにしました」と夫に説明し、彼が賛成してくれたことに感謝しました。「いいね！もし募金集めが困難だったら、僕が手伝うよ」と言ってくれました。私は

人名は書けても、お金の勘定ができませんから募金に行く時は必ず夫を連れて出かけました。彼の助けがなければできなかったのです。

私たちは王添丁校長について、ある日、台東県太麻里郷三和村にケア世帯を訪問しました。対象者は学校に行ったことがなく、長期労働者として働いていましたが、歳と共に目が見えなくなつたため、雇い主の奥さんは彼を山の上にある、水道も電気もない道具小屋に住まわせ、慈

済の支援を仰ぎました。毎月の生活補助金や物資は雇い主の奥さんに代理で受け取つて小屋に届けてもらいました。

ある日、私たちは小屋を訪ねて話を聞いたら、米だけはもらっていたが、お金はもらつたことがないと言われたのです。そのことがあつてから、夫の余輝雄は「訪問ケアのために車を買おう」と決心しました。毎月、生活補助金を直接ケア対象者に届けることで、慈善行為をより完璧なものにしたかったのです。

●初期の大規模災害支援募金活動で、宋美智（写真中央）は台東のボランティアたちと海岸で拾ってきた石に静思語を書いて募金集めをした。



その車は夫の給料の五カ月分に相当し、息子は私に「よくそんな大金を出してお父さんに車を買わせたね」とあきれていましたが、私はケア対象者がもつと気の毒でなりませんでした。

訪問ケアチームは皆、時間がある限り、歐順興先生と陳勝豊スーシオン師兄、そして私たちの車でその人を訪ねて世話しました。以前は訪問地域を分けていみせんでしたが、ボランティアの増加につれ、手分けして訪問するようになりました。私たちの担当地域は卑南郷の太平村と泰安村で、今でも続けています。

どんなに頑張っても氣落ちする時があります。たとえば、一九九一年、慈濟が中国の華東水害を支援し、大愛村を建設しようとした時、数多くの会員から不満の声が上がりました、「台湾を助けず、中国を助けるとは…」実際は、台湾でもケア対象者の必要と不足に合わせて、家の建て替えや家具の補充、周囲の掃除などずつと行っていました。私たちも經濟面に余裕がある方ではなく、客家ハッカ族出身の私は伝統的なお餅や粽を作ってチャリティーバザーに出し、そこで得たお金を慈善活動に充てました。

今までの人生で、私たちはめったに旅行に出掛けることはありませんでした。誰も私たちにボランティア活動を強いたわけではなく、ただこの縁を大切にしたいという思いで、心安らかに、人生の最期までボランティアができれば幸せだと思っているのです。

以前、「菩薩、人間じんかんに遊ぶ」という言葉の意味が分かりませんでした。訪問ケアに参加してから理解するようになりました。人生を速く過ぐす人もいれば、ゆつくり過ぐす人もいて、遊んでいるように見えるからです。あまり固くならず、

氣楽になればいいのです。

夫の余輝雄は二〇一七年に肺がんを患い、翌年に亡くなりました。私は夫に、「今生ですべきことを全てやり遂げたのですから、安心してください。子どもたちも親孝行ですから、氣に掛けることは何もありません」と言いました。いつか私の番が来るのです。体を動かし、話せる間は、ボランティアをし続け、悔いのないようにしたいと思います。（資料提供・陳芝安、林厚成、陳若儀、高芳英）

（慈濟月刊六三一期より）

希望をもたらし、**再建**が始まった

『明史』には鄭和船団がモザンビークに到着していたことが記載されており、その中で鄭和による西方遠征の終点は「比刺」と「孫刺」でした。この記載について、「比刺」とはモザンビーク中部の港町ベイラで、「孫刺」とは沿海地帯のソファアラ州であると考えられる学説もありますが、更なる専門家の検証が待たれます。

現在、ベイラ市に居ても、鄭和船団の活動の痕跡を見つけることはできません。しかし、中国人、台湾人、南アフリカ、イギリス、アメリカ、マレーシア、オーストラリアから華僑がベイラに集まって、現地の人々と一緒に

美事を完成させていました。

話は二〇一九年三月に遡ります。アフリカ東部の沿岸一帯は、サイクロン・イダイの直撃を受け、モザンビークとマラウイ、ジンバブエに甚大な被害をもたらした。慈済ボランティアは直ちに支援活動に動き出した。中でも最も被害の大きかったモザンビークのベイラ市とンハマタンダ周辺が慈済の重点ケア地域で、緊急食糧支援の後、住民の家屋再建、教育、医療など各方面の支援計画にも着手しています。





●サイクロン・イダイに襲われてから1カ月が過ぎても、モザンビークの多くの被災地で水が引かず、損壊した家屋と植物が水面に浮かんでいた。

(右上)

●重被災地に通じる道は寸断され、輸送が妨げられることがよくある。不時の難題に迂回路を模索する間、列を成して停車していると。子供たちがその機会にものを売ってくる。

(右下)

↓モザンビークの首都マプトの現地ボランティアたちは1000キロ以上離れた中部地区で災害支援をした。被災地では住民に呼びかけてボランティアを募り物資の荷卸しや配付を手伝ってもらった。





モザンビーク 慈済の支援地図



4月26日から5月15日まで 建築と農作業用パックの配付

地域： ンハマタンダ地区の ティカ、ラメゴ、
ブジ のグアラグアラ

内容： すき、くわ、釘、ハンマー、バケツ、のこぎり、
ペンチ、シミター、麻ロープ、針金、計10
個の工具、鍋、種、花豆、トウモロコシ粉
または白米

対象世帯数：16,688戸

5月10日から5月16日まで 文房具の配付

地域： ンハマタンダ地区の ティカ、ラメゴ、
ブジ のグアラグアラ

内容： 学生に カバン、文具入れ、練習帳、定規、
消しゴム、鉛筆削り、えんぴつ、色鉛筆
セット、ボールペン赤/青/黒、折り本「静思語」
教師に白米、花豆、「平安」の飾り小物、折り本「静思語」

対象者数：17,552人

災害支援の統計（2019.5.16までに）

- 3月28日に緊急援助としてドンベ区553世帯に白米を配付。
- 食料と日用品パック及び建築と農作業用パックを26,973世帯に配付。
- 文房具を17,192人の学生及び360人の教員に配付。
- 5月中旬から5月下旬まで施療を実施。
- 村、学校、病院の修理または援助建設の中長期計画

3月31日から4月30日まで 食料と日用品パックの配付

地域： ンハマタンダ地区、ドンド区

内容： 白米、トウモロコシ粉、豆、
塩、食用油、浄水剤、
せっけん、蚊帳など

対象世帯数：10,285戸





● 建築と農作業用パック

慈済ボランティアが被災状況の確認に訪れた時、住民が様々な方法で家を再建したいと思っていることを知った。住民は通常地元の資材を使って伝統的な方法で家を建てている。まず、土地を平らにし、木や竹で構造を造る。手作りの型に土と水を入れて2日間乾かすと、煉瓦のようになる。日干しの蘆を壁として使用し、泥土に水を混ぜて煉ったもので壁を補強している。またバナナの葉は材料間の連結を固定するのに使用される。屋根を覆うためには軽量のかやぶきを使う。住民に必要なものは各種の道具と建築材料だったので、ボランティアはそのニーズに応じて購入するとそれらを建築のパックとして配付し、再建をスピードアップさせた。

さらに、被災地では殆どの住民が農業に従事している。サイクロンによって農耕地は被害を受けたが、交通の状況が全面的に復旧していないうちは依然として外国の援助に頼らなければならなかった。そこで慈済は種を配付して住民が自給自足の農業機能を取り戻すよう援助を集中した。それにより一世帯ごとに10個の道具だけでなく、鍋、種、豆、トウモロコシ粉や米、その他の物資が行き渡った。同時にボランティアも空の米袋を提供したので住民は物資を入れて持ち帰ることができた。

◎訳・善耕

麻ロープ

針金



バケツ

シミター

のこぎり

シャベル

くわ

ペンチ

トウモロコシ

釘

ハンマー

種

白米

花豆

空の米袋

LOVE FROM
TAIWAN

Not For Sale 援助物資不可轉售
10KGS



ブジ地区のグアラグラ村にある臨時避難所になった中学校では、慈済ボランティアが住民の世話をしていた。ソファアラ州のブジも大きな被害を被った所で、住民は何キロも離れた、比較的被害が小さかったグアラグラまで避難しており、ブジに戻る気はない。政府はグアラグラに土地を見つけ、慈済の再建計画に合わせて、帰る家を失くした住民のために新しく家を建てる方針である。



↓ティカ村の住民たちが頭に約30キロの再建道具と米を載せて家路に着いた。でこぼこの道を歩くのは容易ではないが、家の再建には道が拓けている。

↑慈済ボランティアが家の再建に使う各種道具を整理してからトラックから下ろし、住民に配付した。





↑ルサカ小学校での授業の様子。被災後、残っていた2つの古い教室は、長い年月と風災の影響で建物全体が危険な状態になっていた。生徒たちは1つの教室に交代で授業を受けていた。

↓慈済は5月、ルサカ小学校で文房具とカバンの配付活動を行い、3000人余りの生徒と住民が参加した。物資の欠乏状況を伺い知ることができる。文房具とカバンの配付で親の負担を減らし、生徒たちは授業に専念することができる。

教育の支援が待たれる



ルサカ協定小学校では、2年生が大きな木の下でポルトガル語の授業を受けていた。これは野外教育ではなく、サイクロン・イダイによって校舎が損壊したからである。風災でンハマタンダでは100以上の学校が被害を受けた。ラメゴ村のルサカ小学校では既に2カ月も屋外で授業しているが、いつ教室に戻るかは未定である。



医療の欠乏

↑ソファアラ州ティカ村のムダの医療ステーションが風災で損傷したため、横の空き地に野外で住民に奉仕するしかない。

←ソファアラ州の地域保健所では、乳幼児の健診で、原始的な秤で赤ちゃんの体重を測っていた。モザンビークは医療資源に乏しく、平均人口10万人あたりの医師の数が3人という状況に加え、分布が偏っており、都会以外の地域は特に不足している。田舎の住民は抛り所がなく、自分で健康を守るしかない。

（慈済月刊六三二期より）





傲慢にならず卑下もしない

人類が天に打ち勝てると勝手に思うのではなく、菩薩の精神を発揮してこの世に福をもたらさなければいけません。

誰もが仏になれる

◎文・釋徳侃／訳・済運

志業体主任たちの報告が終わった後、上人の話はサイクロン・イダイに及び、以下のように語りました。「災害支援はとても大変ですが、アフリカの慈済人はその使命を果たさなくてはならず、各方面からの良縁と共に成就させるべきです。南アフリカの慈済人は国境を越えてマラウイの重被災地で家を建て、モザンビークでは支援物資の一部が届いたため、配付活動を行いました。また、ジンバブエのボランティアは少人数でも被災地に出向いたと聞いて安心しました」。

「これら発心したアフリカの菩薩がいなければ、私たちが苦難に満ちたこの世で奉仕しようと思っても、その苦しみとは無縁のままだったことでしょう。もし、遠方にこれら菩薩の種子がなければ、私たちがどんなに大きな悲願を持っても、苦しんでいる人々に奉仕するためにその地を踏むことはできなかったでしょう。それ故に絶えず『情感に溢れる菩薩』を迎え入れ、至る所で人心を浄化し、人類は奢ってはならないと同時に卑下することもないことを知ってもらいます」。

「驕らないとは、人類の力で天に打ち勝てると勝手に思い込んでではなく、大自然の威力に立ち向かうことはできないことを指します。衆生の業は深いため、人類の力でそれを変えることはできないのです。そして、卑下しないとは、困難に遭遇した時、直ぐに神様や仏様に助けを求めるのではなく、自分で解決することです。というのも、業は一人一人自らが造り出したもので、観念を変えて行いを正してこそ、災害が軽くなるのです」。



● 3月半ば、サイクロン・イダイが東アフリカに甚大な被害をもたらした。ボランティア朝会の前、基金会の職員が慈済支援活動の状況を報告していた。（4月1日）

で、数多くの人が愛を啓発されました。心と愛を募るのは一時的な活動ではなく、長期的に絶え間なく続けなければなりません。世界中の慈済人が続けて活動を推進し、人々の愛を啓発して行動に移す必要があります、その愛の力でこの世の平穏を護るのです」。

（慈済月刊六三二期より）

「大自然の気候変動は外的要因によるものではなく、人類が長い間、積み重ねてきた業によってもたらされたものです。宗教は人々に道理を教え、正しい道を切り開くと共に体で実践するよう導いているのです」。

「そして、宗教は神頼みして庇護してもらおうと思って信仰するようではいけません。特に仏教徒は仏の教えに基づいて菩薩を模範とし、「無縁の人に慈悲心を掛け、自分のことのように悲しむ」菩薩の精神と仏の智慧を人の世に施すのです」。

「人は誰でも仏や菩薩になることができます。ですから、卑下することなく、自立すべきです。今の世の中には苦難が多く、菩薩に学んで人助けする時です。しかし、驕つてはならず、このような事相が仏の言う苦、集、滅、道を証明していることに感謝すべきです。人類が過去から作ってきた苦しみの原因が積み重なって重い業力となっているため、今、大愛を発揮して世の中に福をもたらしてこそ災難をなくすことができるのです」。

「東アフリカ三カ国に支援の手を差し伸べるよう呼びかけたこと

澎湖。

ごみの波に翻弄される島

澎湖（以下ポンフー島と略す）は以前、真っ青な海、白く細かい砂の浜辺が内外の観光客を惹きつける観光地だった。しかし紅羅にあるごみ転送場に行くと、潮の香りに混じってごみの異臭が鼻を突いた。眼の前の落下防止ネットには大きな穴が空いており、正に離島のごみ処理問題に手を焼いていることを物語っている。このネットさえもごみ大軍の勢いを止められないようだ。

文・黄筱哲、蔡瑜璇 撮影・黄筱哲 訳・常様

大地の
守護者



ごみ問題の渦中にある国連

ポンフリー島のボランティア鄧宝珠師姐^{アジエ}の案内で湖西町の東沿岸に車を走らせた。ひとときわ高く立つ白い風車は遠くからも目に付くが、近づいてみると、白く続く砂浜に廃棄物が一面に打ち上げられ、見るに堪えない惨たらしさだった。海洋廃棄物の深刻な問題が、今まさに凄まじい勢いでこの海岸に押し寄せていた。心配されているのは、毎年全世界で海に流れ込む海洋廃棄物が、プラスチック



ゴミだけでも八百万トンと推計されていることである。その大部分がアジア地域に源を発しており、流出が最も多い中国から百四十キロしか離れていないポンフー島は地理的に矢面に立たされている。モンsoon及び黒潮の流れによってポンフー島の海岸線に流れ着いたごみは、殆どが中国大陸、韓国、日本および東南アジア諸国からのものであり、中でもペットボトル、プラスチック類が大部分を占め、次に漁船から棄てられた漁具、魚網、ブイ、電球などがある。

ゴミは海のえさではない

その日、私たちは地元の慈済ボランティアと共に湖西郡の菓葉ビーチで清掃活動を展開した。菓葉地方はポンフー島の東部に位置し、日の出を眺める名所である。日射しが雲の隙間を突き抜けて美しい海面とボランティアを照らした。私たちは目の前の景色に見とれながらも、至る所で海洋ごみを目にして胸が痛んだ。しばらくしてボランティアたちは大きな袋いっぱいにごみを詰めながら、「電球がこれほど多いのはなぜでしょう。直接海へ捨てにくるのでしょうか」と驚いていた。

地元のボランティアによると、ゴミは、冬は季節風によって東北沿岸に流れ着き、夏は黒潮に乗って南海岸に打ち上げられるそうだ。これらの海洋ゴミに対して政府機関或は民間企業、学校、ボランティア団体などが、常に海岸清掃活動を展開してポンフー島本来の天然の美しい海岸線を取り戻すために努力している。しかしご存知の通り、ここのごみは拾ってもきりが無い。ゴミ捨て自体を禁止するかプラスチック製品の使用を減らさなければ、海洋ゴミ清掃が終わる日は訪れないだろう。



旅人には見えない負担

ポンフー島は県政府と民間企業の努力のもとに、観光業で人の流れと商機を掴んでいる。しかしその成功の背後にゴミ処理問題という大きな試練に立たされている。ポンフー島にはごみ焼却炉が無く、県内一市五町のあらゆるごみは船で高雄の焼却炉へ運ばれて処理されるので、その費用は非常に高い。特に毎年行われる国際海上花火大会のある一カ月は、ごみの量が一千トンに達するため、花火から出るごみを直接海に沈めたこともあるそうだ。それを誰も気に留めなかったという。

元々、地元住民の生活にとってごみ処分は負担になっていた。そこに観光客のもたらした膨大な量のごみ加わってまさに泣き面に蜂だ。その上毎年、砂浜清掃後には大量海洋廃棄物の処理にも追われることになってしまった。内憂外患の挟み撃ちに遭い、ポンフー島のゴミ問題は今正に厳しい圧力へのチャレンジを迫ら

れているのだ。

そこで一つ考えて欲しいことがある。私たちが船で台湾本土からポンフー島馬公市へ観光に来て持ち込んだ飲み物の容器、ビニール袋などのごみは、当地の政府機関の予算で台湾本土へ運ばれ、焼却されることになる。そこから吉貝、七美、望安などのマリンスポーツで人気の島まで足を伸



ばした場合、私たちが残したすべてのごみは定期船で馬公市へ送られ、さらに本土へ転送されるのだ。だとしたら、私たちがマイ食器やショッピングバックを持参するだけで、ポンフーのごみ処分の負担減少に役立つのではないだろうか？



最終処分場の末路

私たちは、ポンフーの離島である吉貝、島嶼、望安、七美を訪れた。離島のすべてのごみを転送拠点の紅羅に運搬するに十分な経費と人手を有しているとは限らず、ある地区では現地で埋めざるをえないという現状が分かった。この日、私たちが訪れたある最終処分場では、当地で処分できない家具、漁具、日常用品などがそこに集められていたのである。

離島でもリサイクルを宣伝しているが、回収後の処理が行われていないため、回収物のごみとともに最終処分場に埋められていた。その上、ビーチ清掃活動で拾った大量の海洋廃棄物も最終処分場に置かれたままだった。地中に埋められたゴミは数年経てば分解されると思うかもしれないが、その実そうではない。ある考古学者がごみの山で三十年前の分解されていない新聞を見付けたが、文字までもはつきり読めたそうだ。ごみの増加が加速すると加圧により密度が高くなり、

腐化の空間が欠乏してプラスチック類は百年経っても分解されないことがわかる。土地には限りがあるのにごみは無限に増え、最終処分場は飽和状態に達している。その責任はやはり人類が担わなければならない。



ごみの背後の勇者

ポンフー島では毎日のごみの平均量は約四十トンほどだが、観光シーズンになるとそれが五十トン以上に上る。しかしそれらは一般ごみだけで、資源回収された量は含まれていない。

二〇一八年四月に高雄市の中心地にある資源回収の工場が火事になり、焼却炉が稼働できず、ポンフー島のごみ処理にまで影響を及ぼし、一時は持ち込みが禁止された。これは恐ろしい事態であった。数十トンのごみが毎日変わらず押し寄せて絶え間なく積み重なるのに、転送する場所がないのだ。私たちがごみ転送拠点の紅羅に行った時も目の前のゴミの量は膨大だった。ここでは職員が数日間積まれたままのごみの悪臭を心配して四角形



に圧縮し、ビニールに包んで悪臭を閉じ込めていた。ごみの中から再利用できる物を選んで分類し、少しでもごみの減少に努める労働者もいた。

職員が連日悪臭に満ちた環境の中でごみ进行处理していることに、心の中ではやるせない思いを抱きつつ、彼らには心を込めて感謝の意と敬意を払わずにはいられなかった。
(慈済月刊六二九期より)



環境保全の責任を担おう。

澎湖（以下ポーター諸島と略す）慈済のリサイクルボランティアは二十余年前から既に地元で地域の環境保全を行なっていた。近年、観光の発展に伴ってゴミと海洋廃棄物が増加する中、ボランティアは依然、持ち場を離れていないが、担う責任は以前よりも重くなっている。ポーター諸島の北から南までボランティアの足跡をたどることができる。皆、心を一つにして、この海と環境を守ろうとしている。

◎ 訳・明陸



思い出の海岸に戻る

ポンフー本島の西嶋^{さいしよ}北側の海岸を歩いていると、毎日、拾った回収物を飼料袋に入れながら背中に背負っている、一人のお婆さんに出会う。八十歳近い陳楊專お婆さんである。冬になると、大量のゴミが漂着し、ポンフー本島の人にとっては長年の悪夢である。しかし、陳楊專お婆さんは進んで行動することでその問題と向き合っている。というのも、その海岸は自分が成長した庭先であると共に、家族を懐かしむ場所でもあるからだ。

以前、陳楊專お婆さんと夫は漁師で、漁をして生計を立てていたが、この住み慣れた海が自分の愛する人を奪ってしまうとは思ってもしなかった。ある日、船が転覆して夫は亡くなった。それはお婆さんにとって大きな打撃だった。毎日、涙に暮れるばかりで、二度と海岸に近づかなくなった。ある日、お婆さんは慈済ボランティアに出会い、





スーシェ
師姐たちはお婆さんの世話を続け
ると共に、早く苦痛から抜け出す
よう励ました。そして、「浜辺に
たくさん資源があり、それを回
収すれば、ゴミが減るだけでな
く、人助けにもなるのです」と
言った。思いがけず、その簡単な
一言でお婆さんは生きがいを見
つけ、勇気を出して新たな人生
に踏み出したのである。今では
毎日、勤勉に浜辺で漂流物を拾
い、行動で故郷を綺麗にし、夫
への思いを奉仕に変えた。

模範的なキャプテン

島に住んでいる石龍耳は今回
インタビューした中で唯一の
キャプテンだが、彼もれっきと
したリサイクルボランティアで
ある。私たちが訪ねた時期は丁
度イワシ漁の季節で、石龍耳は
毎日、夕方海に出て翌日の早朝
に帰ってくるという生活を何カ
月も続けるのである。

漁師は海に出る前、漁具の準
備だけでなく、食糧や飲み物な

- 目下、世界 16 の国と地域に 561 カ所の慈済環境保全センターと 10,267 カ所の地域リサイクルステーションがあり、106,498 人のリサイクルボランティアが自発的に活動に参加している。
- 地域のリサイクルステーションには休日はない。台湾では 9 万人余りの慈済リサイクルボランティアが地域社会を守っており、ポンフー島にも環境保全センターが 1 カ所あり、16 カ所の地域リサイクルステーションは毎日運営されている。



ども用意して航海に備える。長い間、漁船の狭い空間と低い環境保全意識から、漁師は利便さを追求して不要のゴミを海に捨ててきた。それは海洋を汚染するだけでなく、海洋生物の命も脅かす。石龍耳は環境保全を知ってから、ゴミが海洋の生態と環境に危害を及ぼすという重大さを理解した。海に出ている間、自分の漁船を模範に、ゴミを捨てないだけでなく、資源を回収するよう船員に言い聞かせている。

海に出ない時、彼は集めた回収物を整理する。この小さい島では誰もが知り合いで、船長が環境保全に力を入れていることも知っている。住民は回収物も持つて行くだけでなく、量が多い時には整理と分別の手伝いもする。整理された回収物を石龍耳は漁船で馬公まで運び、慈済の環境保全センターで処理してもらおう。彼の漁船は瞬時にして環境保全船になり、船長も海を守る環境ボランティアになった。これからもっと多くのポンフー諸島の漁民が、この海と土地を大事にすることを望んでいる。



市場の環境保全を伝承する

夜が明けたばかりのポンフリー本島馬公市の北辰市場は既に賑やかで、見渡すと新鮮な野菜や果物、魚、肉などが並べられ、人の行き交いが絶えない。市場の店は慈済のリサイクルボランティアをよく知っており、皆、野菜や果物の段ボール箱や緩衝用の紙類をボランティアの回収のために取っておく。しかし、市場での資源回収は決して楽ではなく、



環境保全で繋がった絆

山水里の山水ビーチにはやわらかい黄色い砂浜と青い海がある。馬公市での観光客の水遊びと写真撮影の絶好のスポットであり、毎日、大勢の観光客が自転車に向かって。しかし、山水ビーチから遠くない道路脇には見慣れた慈済のリサイクルステーションがある。そこはリサイクルボランティアの翁順安師兄が提供した土地で、しかも建物は回収したもので建てら

固い材質の段ボールを解体するのにかなり力が必要。また、その前に野菜の葉っぱを綺麗にしたり、周りの掃除をしてから帰るのだ。これが薛佩麒夫婦が以前、残してくれた美徳である。

薛佩麒師兄^{スーシオン}と言え、リサイクルボランティアの誰もが感謝と懐かしい気持ちでいっぱいになる。少佐を退役し、最初市場で野菜を売っていた。七十歳を過ぎてから環境保全を知り、妻と一緒に市場で資源回収を始めて十年余りになる。北辰市場のリサイクル作業の方法は殆ど彼が築き上げたものである。

薛佩麒師兄は気さくで優しく、年中休むことなく熱心にリサイクル活動に取り組み、大勢の人に尊敬されていた。彼は四年前、交通事故で亡くなった。しかし、彼が残した模範的な姿はボランティアの心に深く焼き付いており、彼が愛した環境保全をボランティアが引き継いでいる。



れている。外観はパツとしないが、地域住民に資源回収の場として提供している他、そこには翁順安家族が環境保全に投入した因縁がある。翁順安師兄は普段、リサイクルステーションで回収物を分別するだけでなく、資源回収車で地元の家一軒一軒を回って回収物を集め、ステーションに持ち帰っている。また、そこでは彼の家族の姿もよく見かける。長兄の翁武吉さんは彼より二回りも歳上で、お父さんのようでもあり、楽しくリサイクル活動に参加している。平時、翁順安師兄は仕事で忙しく、ステーションに回収物がたくさん貯まった時は、お兄さんやお姉さんが自主的に整理や回収分別の手伝いをしに来てくれる。彼らはいつも黙々と奉仕し、家族間の感情と暗黙の了解は環境保全でしつかり結ばれている。彼らの奉仕は周りの友人たちをも感動させ、友人の子供たちも参加するようになり、今や翁順安一家のリサイクルの助っ人となっている。

ワシを選別していた。それはその季節の重要な仕事で、住民たちの主な収入源でもある。

取材中、私たちはお婆さんに、苦勞して遠洋で取ってきたイワシの体内には、マイクロプラスチックが出てくるかもしれないと言えなかった。また、子供たちには次の世代が今のようこの港で泳げるかどうか、海洋生物のようにプラスチックの海に浸かっているだけになるかもしれないと伝えることもできなかった。目の前にある漁村の島の純朴さと静かな光景が消えてなくなり、ポンフー諸島の人々と子孫の共通の思い出となることがないよう心から望んでいる。

（慈済月刊六二九期より）



異なる世代に共通した期待

私たちは取材を終えた後、ポンフー本島のこの小さな島をあちこち散策した。綺麗に並んで停泊していた漁船を見ていると、楽しそうな笑い声が聞こえた。村の子供たちがダイビングしていた。午後の太陽は強かったが、海水は冷たく、無邪気な子供たちにとって格好の遊び場であり、最初に水泳を覚える場所でもある。近くの女性たちが日差しを利用して小魚やイカを干していた。日が暮れた後、彼女たちは薄暗い街路灯の光を頼りにそこに戻り、十分に干したイ



【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願 絵・陳九熙

あの一年を忘れること莫れ その一念を忘れること莫れ

あの年に発心した一念を忘れる莫れ。

智慧を発揮し、一緒に歩んでくれた、あの人たちを忘れる莫れ。

あの一念を堅守し、心を込めて精進し、

分秒を時代の見証に使い、この世の歴史を書こう。

慈^{ツイヂ}済教育志業体は五月と六月に順

次、卒業式が行われました。慈済科技

大學の卒業式は莊嚴で規律正しく行わ

れ、少なからぬ外国人卒業生の家族が

遠路はるばる卒業式に参加していまし

た。そして、静思精舎で感動と感謝の

言葉述べました。「子供が台湾の学校

で勉強すると聞いた時は心配しました

が、学校と懿徳ママの世話で安心しま

した。まるでもう一つの家庭に入った

ようでした」。

慈済大学付属高校と小学校の生徒は

順序正しく、一人ひとり台上に上がっ

て卒業証書を受け取っていました。が、

とても純真で規律正しく、美しい光景

でした。彼らには「尊師重道」の精神

が窺われ、とても礼儀正しく、心が和

みました。慈済大学は大学生から博士

課程の卒業生まで、校長先生と教授た

ちが卒業証書を手渡し、タッセルの儀

式は学生数が多くても、古来からの儀式ゆえに省略しませんでした。

慈済の一貫教育は幼稚園から大学院まで、即ち種から培養し、芽が出て小さい木から大樹に成長するように人材を造っています。教育志業の創設と医療は関連しています。一九七九年、花蓮に病院建設の考えが起きた時、志が立っていた故に歩みを進めました。一路とても苦労しましたが、一九八六年八月十七日、花蓮慈済病院は開業しました。同時に教育の重要性にも気づき、東部での医療スタッフの募集が困難だったことにも迫られ、看護師学校の

設立を決めました。一九八九年、慈済看護専門学校が開校し、台湾全土から二万人が来て、百七人の第一期生を祝福しました。

慈済科学技術大學は当時の慈済看護専門学校が改制されたもので、創設三十年になりました。卒業式の情景をスクリーンで見えた時、感謝の気持ちでいっぱいになりました。また当時、台大病院を退職した楊思標教授が私の最も必要としていた時に、喜んで初代校長を引き受けてくれたことに感謝しています。

この三、四十年間、楊教授は慈済の医

療と教育に投入し、数多くの智慧のある意見を提供してくれたお陰で志業は前進することができ、東部台湾に良質のものをもたらしてくれました。楊教授は今年百歳になられ、生き生きとした老松のように、たとえ百歳でもリタイアせず専門知識を発揮し続けると言っています。彼の人生の価値観と方向は非常に正確で、医療界と教育界の模範を示してくれています。

今、心からあの一年のあの一念を理解し、私たちは人生と志業の恩人に感謝すべきで、その中には人生の貴い足跡も残っているのです。

学校にしる病院にしる、一つの瓦やレンガ、砂やセメント等々、慈済人の布施と労力がなかったら、工事を完成させることはできなかったでしょう。多くの志を共にした専門スタッフが花蓮の医療に投入し、三十余年の間に無数の人の病苦を取り除き、健康を取り戻して来ました。慈済教育志業は数多くの卒業生を送り出し、今でも多くの人が志業体で重責を担っています。

当初、無一物だった状況下で、病院と学校を創設することを決心し、その一念を行動に移しました。人々の信頼と助力に感謝しなければなりません。

縁が結集したことで、この世のために
なる建築物が次々と完成しました。行
動してきた時間が累積して、今のよう
な成果を目にすることができたのです。
これが歴史であり、経典なのです。

当時のことを忘れず、その一念を忘
れないように。正しいことは行動に移
し、世の人々のために際限のない善行
をして千秋万世に影響を与えればいい
のです。もし一念が偏り、一步踏み間
違えれば、誤った方向に行ってしまう
ます。ですから心の在り方に注意しな
ければならないのです。

善行するには六度：「布施、持戒、

忍辱、精進、禪定、智慧」の行いが必要
です。菩薩心が起これば精進し、道が
如何に遠くて困難であっても「無縁大
慈、同体大悲」の精神を持ち、衆生の為
にどんな辛いことでも進んで行い、重々
の困難を取り払い、種々の執着を克服
して耐えるのです。もし、他人の言っ
た一言に耐えられなければ、どんなに
良い事でも途中で消えてしまいます。

あの年に発心したあの一念を忘れず、
更にそれを守り通さねばなりません。ま
たこれまで多くの人が智慧を発揮し、体
で実践して共に歩んできたこの道を忘
れてはならず、こんなにも貴い人生なの

ですから記憶に残しておくべきです。

日々、時間を無駄にせず、慇懃に精
進し、放逸を慎み、片時も時代を見証

することを忘れず、人の世のために歴史
を書きましよう。皆さん、心しましう。

（慈済月刊六三二期より）

慈済の環境保全運動はこうして始まった

□地球にやさしい行動

台湾は浄土である。緑の山があり、青
い水がある。手を取り合ってこの島を守
るなら、台湾はもつと美しくなる。證嚴
法師は、1990年8月23日の講演で、
「拍手する両手で資源回収をしましょう」
と呼びかけた。

『地球と共に生きていく』より（）



撮影・黄筱哲

慈済大記事七月……………

訳・済運

07・01	◎慈済の2018年インドネシア・スラウェシ島震災支援で、シギ県ポムベウエ村恒久住宅の支援建設の起工式が本日行われた。 ◎マレーシアのセラングールとマラツカ支部の12人の慈済青年ボランティアが1日から5日まで世界青年基金会(WYF)の「第14回青年海洋、永續發展目標国際論壇」に参加し、世界各地の青年と慈済環境保全理念について交流し、海洋ゴミを解決するアイデアを交わすと共に、パンタイ・シリングビーチで浜辺の清掃活動に参加した。
07・03	2019年国連難民高等弁務室とNGOの年次総会が3日から5日まで「より良い協力体制」を主題に、スイスのジュネーブで開かれた。慈済基金会からは職員とボランティアら5人が代表で参加し、世界中の難民の現況を把握すると共に、国連の代表や各国のNGOと意見交換した。そして、慈済の世界各地での難民支援の成果を報告し、共同

07・05	作業する機会を模索した。 花蓮慈済病院は5日と6日、マレーシアのペナン国際フォーラムで2019マレーシア・台湾イメージ展に参加し、骨髄移植と細胞治療等の医療技術関連の情報を提供した。
07・06	◎アメリカ・カリフォルニア州リッジクレスト市で4日と5日、マグニチュード6・4と7・1の地震が発生した。慈済アメリカ総支部のボランティアは6日、被害調査を行い、11日から現地の災害協力センターに出向くと共に、赤十字社と協力して買物カードを70世帯に配付した。 ◎慈済学校財団法人と慈済基金会及び慈済アメリカ総支部は合同で第3回国連プロジェクト別の実習項目を実施した。慈済大学の国際学生3人が選ばれ、アメリカで7週間にわたる実習活動を展開し、アメリカ総支部のチームと共に国連の様々な会議に参加して国際的な広い視野を養った。

07・12	と洋墩郷など重被災地区を視察すると共に、避難所に住民を見舞い、14日と15日に毛布と生活用品を配付した。 ◎慈済科技大学の海外ボランティア及び人文国際交流で、39人の教師と学生が3チームに分かれて7月10日から8月21日までトルコ、ドイツ、イギリス、マレーシア、シンガポール及びオーストラリアに行き、学校間の交流や老人ホーム慰問、貧困家庭の訪問などボランティア奉仕を行った。また、マレーシアとシンガポール、オーストラリアでは12回にわたる『證嚴法師がかたる昔話』をアレンジした「孔雀が虎を救う」児童劇を演じ、生命を愛護する理念を伝えた。今回、新たにトルコを加えたのは、難民慰問の他に、マナハイ国際学校の難民児童たちと交流するためである。 ◎慈済基金会は交通部中央氣象局と「防災・災害支援時の氣象応用及び教育を広める協力覚書」に署名した。科学技術と環境保全、防災を軸に、共同で災害防止と環境保全の仕事を進める。
-------	---

07・10	◎中国福建省南平市順昌県は7月上旬、豪雨に見舞われ、被災した。福州と廈門、福鼎の慈済ボランティアが10日から12日まで仁寿鎮	07・09	国連永續發展ハイレベル政治論壇（HLPF）が9日から18日までアメリカ・ニューヨーク市にある国連本部で開かれた。慈済アメリカ総支部の曾慈慧副執行長とドイツ慈済ボランティアの楊済洪と林美鳳及びモザンビークの慈済ボランティア、ディノ・フォイが代表で出席し、数多くの関連フォーラムに参加して各国代表と交流した。また、11日は国連グローバルメデア部門と共同で関連フォーラムを催し、ディノ・フォイが慈済のアフリカにおけるサイクロン・イダイ災害支援の経験を報告し、被災者への生活の再建と、防災能力を身につけるための共同支援及び協力の方向を、参加者と共に模索した。	07・08	インドネシア慈済大愛病院はインドネシア病院監査委員会から最も高い5つ星の監査結果を得た。本日、院長のクリスティアン・ト医師が代表で証書を受領した。
-------	---	-------	--	-------	--

07・20	インドネシア大愛テレビ局は放送開始12周年を迎えた。中国身体障害者芸術団を迎えて、7月20日から8月8日までジャカルタ、スラバヤ、メダンで合計7回公演し、入場券の売り上げを大愛テレビ局の運営資金に充てる。
07・19	慈済科技大学は慈済基金会と歩調を合わせて政府の長期ケア政策に呼応し、弱者家庭の若者が学習することで技術を習得して家庭の経済的負担を減らすための奨学金を設立し、2019年から「長期ケア科フィリピン人学生クラス」を設けた。学生募集チームは面接試験を行うためにフィリピンに出向き、本日先ず、オーモック大愛村で37人の学生と面接した。
07・18	慈済慈善事業基金会は中国国際公益学院公益ケースセンター及び北京師範大学中国公益研究院から合同で「十大公益模範ケース」の1つに選ばれた。

07・13	◎慈済基金会は2016年のエクアドル地震の後、「カノア聖フランシスカン絶えざる救いの聖母教会」の支援建設を行ってきたが、本日、寄贈及び竣工式典が行われた。 ◎アメリカ慈済医療志業基金会のチームはエクアドル医療人員と共に13日から16日までサンビンセンテ県カノア町とマンタ市サンマテオ町で施療活動を行い、住民に漢方医と西洋医の診療を行った。また、14日にはエクアドルに、現地の華僑である曹呈瀚医師が発起人となって慈済人医会の拠点を開設したが、既に10数名の医師が参加していた。
	◎慈済基金会は苗栗志業パークに「慈済防災準備教育センター」を設立した。そこには「防災準備科学及び一般知識館」、「防災準備行動体験区域」、「防災調整運用研修教室」、「コミュニケーションサービス」、「模擬避難所運営教室」、「慈悲の科学技術展示、体験区域」などが設置されている。

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路2段248号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2019年8月14日発行・272号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・王麗雪

校閲 黒川章子

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



試練が重なる授業

ルサカ協定小学校の教室では、1人の3年生の生徒が先生の指名で黒板の前に立って、ポルトガル語の文章を読んでいて。その子は時折、読めない単語が出てくると、恥ずかしそうに振り向いて助けを求めている。

モザンビークの教育資源は乏しく、田舎の学校では更に窮乏が著しい。慈済ボランティアはサイクロン・イダイの災害支援のために、ルサカ協定小学校を含め、学校に文房具とランドセルを提供した。

(関連記事は今期の特別報道に記載されています)

(文 / 撮影・蕭耀華 モザンビーク・ソファアラ省ヤマ郡ラメゴ村 2019.5.9)



慈済ものがたり